

くずし字判読のための教材開発 —「どうすれば読めるようになるのか」という観点から—

中村 健史

国文学を専攻する大学生は、授業のなかでくずし字（ひらがなと簡単な漢字程度）の判読、翻字に取りくむことが多い。しかし、その教授法や教材については、かならずしも十分な工夫が凝らされていると言いがたい。

稿者の学生時代を思いかえしても、せいぜい丁寧な字体で書かれた写本、板本を探してきて、教員が二三度手本を見せ、あとは学生のほうで試行錯誤しながら読みすすめてゆく、というのが一般的なやりかただった。「どうすれば読めるようになるのか」という説明はなかったし、あったとしても個別の文字や書体に関する豆知識のたぐいであって、あらゆる場面に通用する方法論、といったものはずいぶんおぼえがない。

だが、「要するに、習うより慣れろだ」というのであれば、近代的な意味での学問とは言いがたい。現象の背後にひそむ普遍的な法則を（たとえいかに不完全であろうと）別抉えてこそ、大学でくずし字を教える意味ある。

本稿は「どうすれば読めるようになるのか」という問いに、ささやかながら答えを出し、教材開発に結びつけようとする試みである。

1. 文字の認識

人間は文字をどのように認識しているのだろうか。



(図1)

(図1) はすべて「あ」という文字をくずしたものである。しかし仔細に見てゆくと、それぞれ形が微妙に異なっていることに気づくだろう。たとえばDとFを比べると、ほとん

ど別の文字である。一画目（「あ」の初筆の横棒）を見ただけでも、Aのように「つ」型になっているもの、Bのように水平に書かれたもの、Cのようにカーブしたもの、Eのように右肩下がりなもの、と多様だ。また、Dは三本の線から構成されているが、Gはすべての筆画がつながって一本の線になっている。

けれども、多くの人は直感的にA～Gがすべて「あ」と理解するに違いない。なぜなら、われわれは「あ」という文字の基本的な構造を知っており、(図1)はいずれもその条件を満たしているからである。

「基本的な構造」とは、くわしく言えば、以下のようなものだ。「あ」という字は、まず横棒を一本引く。この横棒は、長くても、短くても、直線でも、曲線でも、右肩上がりでも、右肩下がりでもいい。とにかく横棒を一本引く。次に、はじめに書いた横棒と交差するように縦棒を一本引く。これも、直線をまっすぐ真下に引っぱってもいいし、少し左側にふくらんだ曲線（たとえばCのような）でもいい。長さは自由だが、ふつうは横棒の上に出ている分よりも、下に出ている分を長くする。次に、縦棒の右側から左下へ、斜めに交わる線を引き、終筆のところで方向転換して半円形を描く。要するに「の」の字の形になればいいわけだが、これもAのようにきっちり書いてもいいし、Fのようにやたらと右半分を大きくしても、Gのように平たくつぶれていてもかまわない。むろん横棒、縦棒、「の」という三つの部品を全部つなげて、一筆書きにしても「あ」だ。

2. 文字の基本構造

文章にするとくどくどしいが、われわれは最初にひらがなを習って以来、無意識にこうした諸条件にしたがいながら文字を使用してきた。手書きの書体は千差万別で、「あ」ひとつとってもじつに多様な形がある。しかし、人々はたしかに何らかの基準——どういうふうになっていれば「あ」と読めるのか——を心得ているのだ。

かりに、それを「文字の基本構造」と呼ぶことにしよう。思うに、「基本構造」はもっぱら三つの要素から成りたっている。

まず、〈部品の数〉である。文字はいくつかの部分から形づくられている。きちんと数えるのはなかなか難しいが、便宜上、線や点、すなわち筆がいったん紙についてから離れるまでをひとつの「部分」と考えるのが、分かりやすくていいだろう。たとえば「あ」であれば、横棒、縦棒、「の」という三本の線でできているので、〈部品の数〉は3である。もっとも、同じ「あ」であっても、Gのように一筆で書いたもの（〈部品の数〉は1）や、Aのように横棒と縦棒がつながっているもの（〈部品の数〉は2）もある。この点、くずし字はかなり自在であるから、〈部品の数〉といっても「割合几帳面に点画を離して書いた場合の、最大数に近い数」くらいに理解してほしい。

第二に〈部品の形〉が挙げられる。ただし、「筆がいったん紙についてから離れるまで」を「部品」と考えるなら、その形はさほど複雑にならない。特にひらがなに限っていえば、ほとんどが線や点、多少ややこしいもので「の」程度であろう。

最後に〈部品の位置関係〉。「あ」の場合なら、横棒と縦棒は十文字に交差しなければならないし（ただし直角でなくてもよい）、「の」は横棒の下にあるのが普通だ。たとえ〈部品の数〉や〈形〉が正しくとも、位置関係が間違っていれば文字は正しく認識されない。

3. 筆画の連綿

くずし字判読のためには、以上述べてきたような「基本構造」を理解しておくことが重要である。しかし、その際に大きな障害となるのが「筆画の連綿」である。（連綿という言葉は、通常「文字と文字とをつなげる書線」を指すが、ここでは論述の都合上、「一つの文字を構成する筆画と筆画をつなげる線」をわたくしに「筆画の連綿」と呼ぶことにする。）

文字である以上、くずし字はいくつかの「部品」から成りたっている。たとえば、Gのような一筆書きの「あ」も、原則としては三つの筆画（横棒、縦棒、「の」）から構成されているし、当人もおそらくはそのつもりで書いている。われわれも急いでメモをとるときなど、「ㄨ」を（図2）の形にしてしまうことがある。しかし、それは何も「さんずいは（図2）のように書くのが正しい」と考えているわけではなく、少しでも時間を省略するために、便宜上、点画をくっつけたに過ぎない。（なお（図2）の図版は小野鶯堂『三体千字文』（博文館、1925年）より引用。）



（図2）

（図3）

つまり、「部品」をつなげて書いた字体（（図1）G、（図2））には「本来その文字を構成する線や点」と「本来の線や点をつなげるための二次的な線」（筆画の連綿）が混在している。くずし字を読もうとするとき、おそらく初心者がもっとも戸惑うのは、両者の見分けがつかないことであろう。流れるように書かれた線や点のうち、どれが一次的なもので、どれが二次的なものか。その判断がつかなければ、〈部品の数〉や〈形〉を把握するのはほとんど不可能である。

（図3）は、（図2）のさんずいを「本来の線や点」（円で囲った部分）と「二次的に発生した筆画の連綿」（それ以外）に分けたものである。頭のなかでこうした区別をつけられることが、くずし字を読むための第一歩ではないだろうか。

4. 教材の開発

ここまでの検討を踏まえると、くずし字が読めるようになるには「筆画の連綿を省略した文字の基本構造（部品の数、形、位置関係）を知っていること」が重要である。

ただし、すべての文字についてそれを網羅する必要はない。すでに述べたとおり、国文学を専攻する場合、まず問題となるのはひらがな、次いで簡単な漢字であるから、取りあえずは前者を主とするのがよいだろう。そして、「知っていること」、すなわち暗記を目標とする

以上、数がある程度限定したほうが効率的である。たとえば、出現頻度の低いもの、現在のひらがなと同じ字形のものについては省略し、変体仮名を中心とすべきである。

以上の観点から作成した教材が参考資料の内容である。

参考資料

あ 阿	い 以	い 伊	う 宇	え 江	お 於	か 可	き 起	き 幾
き 支	く 具	く 久	け 希	け 介	こ 古	さ 左	さ 佐	し 志
す 春	す 寿	す 須	せ 勢	せ 世	そ 楚	そ 曾	た 多	た 多
た 堂	ち 知	つ 徒	つ 川	つ 津	て 天	と 登	な 奈	な 那
に 尔	に 丹	に 耳	ぬ 怒	ね 年	の 能	の 能	の 野	は 者
は 盤	ひ 比	ひ 飛	ふ 婦	ふ 布	へ 遍	ほ 保	ほ 不	ほ 本
ま 万	ま 萬	ま 満	み 三	む 無	め 免	も 毛	や 屋	ゆ 由
よ 与	ら 羅	り 里	り 利	り 利	る 留	る 留	る 累	る 流
る 類	れ 連	れ 礼	ろ 路	わ 王	わ 己	を 越	こと と	